HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	多和田葉子研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	袁, 嘉孜
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第15993号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92380
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Chia-Zu_Yuan_review.pdf (審査の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　袁　　嘉　孜

主査　教　授　中　村　三　春
審査委員　副査　教　授　水　溜　真由美
副査　教　授　谷古宇　　尚

学位論文題名

多　和　田　葉　子　研　究

・当該研究領域における本論文の研究成果

現代を代表する作家の一人である多和田葉子は、小説言語として日本語とドイツ語の両語を駆使する小説家であり、国内はもとより世界的にも評価が高く、日本のみならずドイツにおいても数々の文学賞を受賞している。しかるにその作風は、日独両語に限らず、ヨーロッパひいては世界の言語・文字・文学・文化を作品において交錯させ、母語・母国語の制度的規範から大きく逸脱する、多和田のいわゆるエクソフォニーの手法を縦横無尽に展開したものであり、その読解は容易ではない。エクソフォニーは、移民文学・クレオール文学などの地政学的な要因によって生まれた越境文学とは異なり、作者が意図的に多言語を越境・融合して作り出す文芸手法であり、その所産を多和田はエクソフォン文学と呼んだ。従来も多和田文学における独特の越境性については注目されてきたが、いまだにまとまった理論的・総合的な追究はなされていない。本論文はこの問題について、他のテクストから作られるテクストとしての第二次テクストの生成に関する理論的な観点に基づき、初めて正面から取り組んで高い研究成果を上げたものである。

本論文では、第一に、多和田による第二次テクスト生成の原理を、パロディやアダプテーションと似るが、原テクストの要素を大きく変化させずに導入する〈借用〉の概念によって説明し、日本語とドイツ語とを越境する形で重ね書きがなされ、それを通じて作品が生成・変容する有様が綿密かつ執拗に追究されている。第二に、この観点から、小説『うろこもち／ *Das Bad*』『文字移植』『ペルソナ』『犬婿入り』『ゴットハルト鉄道』『ふたくちおとこ』『ふえふきおとこ』、戯曲『ティル』など、およそ本格的な論究のなかった多和田の主要な作品群について初めて具体的に分析を加え、また多和田文学の総体についても総合的な研究を行った。第三に、多和田のエクソフォン文学の追究にあたり、多数のドイツ語による関連作品や資料に目を通し、取り上げた諸作品を対象として、初めてこのドイツ語資料を参照・照合して正面から論じた。この作業を、発動者・媒介者・受容者の様態を逐一検討する比較文学的な論証により行ったのである。第四に、それらの帰結として、多言語にまたがる言葉と言葉との接続が新たな言葉を生み、伝承や先行文芸を継承して変容させる多和田の作品群について、その実態と由来を調査と解釈によって解明した。ギリシャ神話、聖ゲオルク伝説、ドラゴンの伝承、グリム童話、オイディプス神話、ヴィルヘルム・テルの物語、旧約聖書、『オイレンシュピーゲル』や『ハーメルンの笛吹き男』の伝承、『猿女房』や『犬婿入り』などの日本昔話、あるいは能・能面など、東西にまたがる多数の文学が詳細に分析され、それらと多和田作品との間の繋がりが、作品の実態に応じて具体的に検証された。第五に、そららの作品中に、

作者の在独体験にも根ざす越境者としての複合的なアイデンティティの獲得のあり方を見出し、国際化と世界文学の時代における人の生き方に関しても、深甚な見方を示すに至ったのである。

これらのことが文献的な実証性と様式論的な評価を兼ね備えた論理展開によって、詳細に論述されていることから、本論文は多和田葉子研究の領域において、斬新で、かつ高水準の研究成果を上げたものと位置づけられる。

・学位授与に関する委員会の所見

本審査委員会は、慎重な審査の結果、本論文を高い研究水準にあるものと判断した。本論文によって、多和田文学における第二次テクストとしての様式論的な側面と、特にドイツおよび西洋文学と神話・伝承との比較文学的な要素や日本の昔話との間の関係、さらにはナショナリティや言語にまつわる越境者的なアイデンティティについて、これまでの研究史においては曖昧なままに留め置かれていた課題が解決され、新たな研究段階に到達したものと認められた。

一方では、審査において本論文に見られる幾つかの問題点も指摘された。すなわち、（１）多数に上り相互に傾向も異なる多和田の作品群から、これら特定の作品を選んで論じる必然性についての説明が乏しいこと、（２）個々の作品について、本論文の主題以外にも目配りをした完全なディスクリプションを行うことについてさらに配慮が必要なこと、（３）援用されている幾多の文芸理論について、必ずしも完璧に妥当か否か不明瞭な場合が見受けられることなどである。しかし、これらの諸点はいずれも申請者の高い研究意欲のゆえでもあり、本論文全体の達成した研究成果にとって些かも瑕疵となるものではない。それらの課題は、いずれも申請者が今後も多和田ひいては日本近代文学と文芸理論の研究を継続することによって解決に導き得るものである。

本審査委員会は、以上のような審査結果に基づき、全員一致により、本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものと判断した。